

インターナショナルセーフスクールの認証取得への挑戦 ～厚木市立清水小学校が目指す安心・安全な学校～

倉持 隆雄
厚木市地域力創造担当部長

I はじめに

2010年11月18日、厚木市立清水小学校は、WHO（世界保健機関）セーフコミュニティ推進協働センターが、より安全な教育環境づくりに取り組む学校に与える国際認証である「インターナショナルセーフスクール」の認証を、世界で49番目、日本では大阪教育大学附属池田小学校に次いで2番目に取得した。〈写真1〉

清水小学校では以前から、児童の安全向上をめざし、自治会や老人会、PTA、教職員らが協働して地域ぐるみで子どもたちの安全を守る組織「しみずっ子すこやかネットワーク会議」の設立をはじめ、各種安全対策に取り組んでいたが、2008年には、児童の交通事故が7件も発生した。（うち6件は自転車乗車時の事故）

これに危機感を覚え、従来の安全対策に加え、児童の自転車乗車時の「ヘルメット着用運動」や「自転車安全教室」などの自転車交通安全対策にも力を入れるなど、事故・けが撲滅のための運動が進められた。

2009年には、折しも厚木市がセーフコミュニティの認証取得を目指していたこともあり、また、これまで清水小学校が実践してきた安全に対する取組が、セーフコミュニティの理念・手法を取り入れることにより、さらに効果的な取組へと発展するものと判断したことから、市のセーフコミュニティモデル地区の指定を受け、地域の実情に応じたセーフコミュニティ活動を展開することとなった。

その後、セーフコミュニティ活動に携わる機会が増したことにより、インターナショナルセーフスクールの認証制度を知ることとなり、安全に対する意識を一層高め、取組を体系的かつ効果的に推進するために、本認証の取得をめざすことを決めた。

II 現状把握と課題抽出

清水小学校では、外傷の発生状況の把握や課題抽出のため、外傷データの集計やアンケート調査等を実施した。2008年4月1日から2009年3月31日までの間、学校保健室で記録した校内外傷発生データ5,636件を集計した結果、「けがをした時間帯は、『昼休み』がトップで15%、

次が『15分休み』で11%、「昼休みにけがをした原因のトップは『物にぶつかった』で約33%、次が『転んだ』で約27%、「けがをした場所は、『教室』がトップで約27%、次が『校庭』で約23%」などの状況が判明した。

また、「自転車用ヘルメットに関するアンケート調査」では、「児童のほとんどが自転車を所有している。（全学年90%以上）」にもかかわらず、「自転車を持っている児童のうち、いつもヘルメットをかぶっている児童は、全体で10%以下」という実態も明らかになった。

さらに、しみずっ子すこやかネットワーク会議のメンバーを中心に開催したワークショップにおいても、地域課題の抽出・共有、対策の検討などが行われた。

このほか、児童意識調査や学校づくりアンケートなどを実施し、児童の意識・行動の把握をしている。

III 優先課題及び目標

清水小学校では、データ集計やアンケート調査、ワークショップの開催などにより、優先課題及び目標を設定した。

まず、優先課題として挙げたのが、「昼休み」など休み時間及び「教室」、「校庭」におけるけがの予防（校内外傷発生データから）、自転車用ヘルメットの着用推進（自転車用ヘルメットに関するアンケート調査結果から）、自転車事故の防止（ワークショップの結果から）、そして通学路等の安全確保（住民の声等から）である。

また、目標としては、校内外傷発生件数の削減（2008年度5,636件→2012年度3,600件）、自転車用ヘルメット着用率の向上（2008年11月8.8%→2012年11月70%）、交通事故ゼロ日数の延長（2010年5月31日現在380日）、児童の意識・行動の改善、子どもたち同士の好ましい人間関係の構築などを掲げた。

IV 安全向上プログラム

優先課題の解決及び目標達成のため、清水小学校で実施しているプログラムの一部をここで紹介する。

（1）校内外傷発生箇所図の掲示（児童の取組）〈写真2〉
校内に学校の平面図を掲示し、児童自らがけがをし

た箇所にシールを貼り付けている。

このことにより危険箇所が可視化され、安全への関心を高めるとともに、改善すべき点を児童自らが発見し、具体的な対策を講じる視点を涵養することになる。

(2) 校内けが予防運動（児童・教職員の取組）

児童会・各委員会が、校内外傷発生データをもとに、けがの多く発生した「時間帯」、「場所」、「原因」などを児童に周知し、注意を喚起するとともに、ルールづくりや、児童相互の予防体制を確立する。

(3) ヘルメット着用運動、ヘルメット着用率グラフの掲示（教職員の取組）〈写真3〉

自転車用ヘルメットの着用を促すチラシの配布や、着用率の調査結果をグラフ化したものを校内に掲示し、児童や保護者への啓発、意識改革を推進している。

(4) 命についての学習（教職員の取組）〈写真4〉

「道徳」や「総合的な学習の時間」などの授業において、命を大切にすることや、自ら考えて安全な行動ができる力（危険回避力、危険予知力）をはぐくむためのカリキュラムを取り入れている。

たとえば6年生では、「総合的な学習の時間」の中で安心・安全な学校を自ら創り上げるために、グループで校内の危険箇所の改善を図る授業を行っている。

(5) 自転車安全教室等の実施（家庭・地域の取組）〈写真5〉

自転車の安全な乗り方やマナーなどを学ぶ自転車安全教室等を実施している。また、「交通安全子ども自転車神奈川県大会」に出場し、この教室等で習得した技術の成果を発揮した結果、2009年には見事第4位に入賞した。

(6) 愛の目運動（家庭・地域の取組）〈写真6〉

老人会や交通安全指導員、交通安全母の会、PTAなどの各種団体が、登下校時の子どもの安全を守るため、見守り運動を実施している。

(7) セーフティーベスト着用運動（地域の取組）〈写真6〉

愛の目運動を始めとした各種活動や行事開催の際に、従事者がセーフティーベストを着用し、市民が一丸と

なって安全に対する取組を行っていることを不審者等に見せることにより犯罪等の未然防止を図っている。

(8) かけこみポイントの充実（児童・教職員・家庭・地域の取組）〈写真7〉

児童を不審者等から守ることを目的に、住宅や商店を緊急避難場所として指定し、通学路等の安全確保を図る「かけこみポイント」の指定数の一層の拡大のため、各家庭や商店へ協力を呼びかけ、現在、890箇所余りが登録されている。児童は各ポイントの家へ、お礼の手紙やお花の種をお届けし、感謝の気持ちを伝えている。

V おわりに

インターナショナルセーフスクールの認証取得に向けて取組を進めてきたわけだが、安心・安全な学校づくりに終わりはない。

しかしながら、ここ数年の取組により、徐々にではあるが取組の成果が目に見える形で現れてきた。

校内外傷発生件数は2008年度には5,636件だったが2009年度には4,734件に、自転車用ヘルメットの着用率は2008年11月の調査では8.8%だったのが2010年5月の調査では35.3%に改善されてきている。

インターナショナルセーフスクールプログラムを実践することにより、これまであまり意識してこなかったデータを用いた現状把握や課題抽出、効果測定、評価という点に注視することになり、ややもすると漫然となりえる学校における安心・安全に対する意識や活動が、活性化の方向に転じた結果であると考えている。

今後も、協働による運営基盤の充実を図り、データ等を用いた科学的根拠に基づいた取組を継続的に進めていきたい。

どこにでもある普通の市立小学校がこの認証を取得したことにより、インターナショナルセーフスクールプログラムの国内における普及に向けて、わずかながらでも貢献することができたとすれば、望外の喜びである。



写真1 インターナショナルセーフスクール認証式

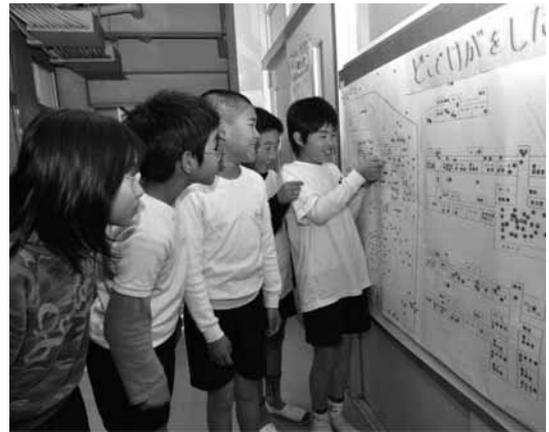


写真2 校内外傷発生箇所図の掲示



写真3 ヘルメット着用率グラフ

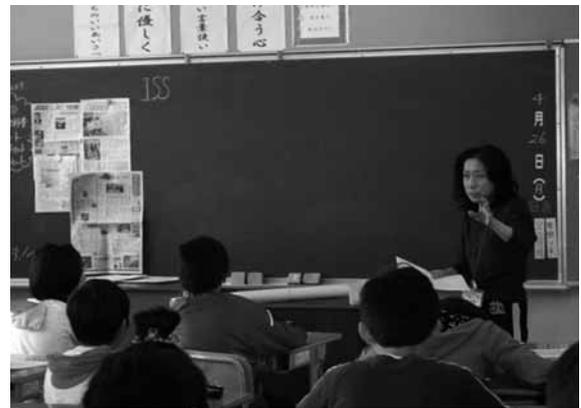


写真4 命についての学習



写真5 自転車安全教室



写真6 愛の目運動・セーフティーベスト着用運動



写真7 かけこみポイント